

原点を守る

動物応用科学科 3 年 鏡内康敬

2010年7月3日、生態学者であり、日本の文化人類学者であった梅棹忠夫氏が90歳で死去した。京都大学今西錦司門下の一人として中国北部・大興安嶺探検やモンゴル研究など、探検界や民俗学に大きな功績を残した人物であり、私の尊敬する人の一人であった。

梅棹氏は、自身の原点は山にあるという。山へ行き、ただぼんやりと歩くだけでなく、動物を見て、植物を見て、地質を見て、気象を見る。そうして自然科学の基礎をフィールドで鍛えられたそうだ。野外研究者なら誰もが同様に鍛えられたらろうし、山は研究者の原点である。ゆえに、山は多くの学問の原点だともいえる。

そんな山が現在、危機的状況にある。世界では、地球温暖化に伴うヒマラヤ氷河の縮小。日本では、登山者の増加による登山道の荒廃、高山帯での尿尿処理問題などが挙げられる。なかでも深刻なのが、大型哺乳類の高山帯への侵入による植生への影響ではないだろうか。

6月下旬に南アルプス・聖岳へ調査に行ってきた。登山口での多数の蛭、斜面の土砂崩れ、登山道を覆い隠すほどの倒木、毒

草バイケイソウの群落(写真1)、聖平におけるニッコウキスゲの消滅 etc。どれもシカによって引き起こされたものだと言われている。現に、亜高山帯では多数のシカを確認し、標高3000m付近でも足跡を確認した。今まで多くの山に登ってきたが、こんな山は初めてだった。このまま何も手を打たなければ、数十年後、どんな状況になるかは容易に想像がつくと思われる。

多くの研究者や学問、登山家、探検家の原点を守るためにも、この問題に取り組もうと思った。



写真1 バイケイソウの群落。かつてはお花畑だった